

本書の特徴と活用について

本書のタイトルにもなった『未来を拓く交通・安全学』とは、交通社会を取り巻く諸問題を広く捉えるとともに、交通安全を支えている技術体系や社会システムについて、さまざまな専門家の英知を取りまとめ、未来への提言を行おうとするものである。

本書は全13章から構成され、各専門家が次世代の交通社会を学ぶ上で不可欠と考えるキーワードを節として独立させ、解説を加えている。そのため、必ずしも最初の章から読み始める必要はなく、章や節をまたいで読んでも理解できるようになっている。以下に本書の流れを概説する。

第1章から第2章までは、都市工学の専門家が都市と交通のあり方に言及しつつ、これからの交通社会を構築する上で必要な知識を解説している。続いて第3章では、環境学の専門家が、環境問題と交通の関係を概説し、生態系も考慮した低炭素な社会に向けての知見を示している。

第4章以降では各論を展開している。第4章では、公共交通と都市活動や地域活動の関係について説明するとともに、DXを含めた公共交通の最新技術について解説している。第5章では、交通流、交通事故のメカニズム、道路構造といった交通工学の基礎について解説している。

第6～8章では、安全性向上のための技術に着目し、インフラと自動車の両面から解説している。第6章では交差点などの交差点構造など道路インフラの観点から安全技術を解説している。第7章では、車両安全やASV (Advanced Safety Vehicle) などの車両の観点からの安全技術について解説している。とくに第8章は、近年の主要なテーマの一つである自動運転に関する独立した章として、技術開発に加えて国際標準化活動について俯瞰した。

第9～11章は、ドライバーや交通参加者といった人間の側面から交通安全について解説している。第9章では、交通行動モデルやリスク知覚といった交通心理学について解説している。第10章では、交通安全教育として、公民性教育としての交通安全教育や運転者を対象としたトレーニングモデルなどについて解説している。第11章では、交通外傷に対する救急医療や運転者の健康に起因する事故について解説している。

第12章は、交通安全にかかわる法律の視点から、交通事故の問題に加えて、近

年に急速に発展したテーマである自動運転の法律問題について論じている。第 13 章は、行動経済学、費用便益といった経済学の視点から交通政策、渋滞、環境の問題を解説している。

最後に、持続可能な交通社会と SDGs への貢献と題して、SDGs の 17 領域に対する交通分野の位置付けを論じた。また、「交通・安全学」の発展について IATSS 50 年史に沿って俯瞰した。

このように、本書は各分野を横断的に解説することで、読者が複眼的な視点で「交通・安全学」を修得できることを意図している。本書は国際交通安全学会の特徴である「学際性」を強く意識した書物であり、読者が各章、各節を自由に読み解くことで、その相互間に埋もれている新たな知見を発見してもらえたら幸いである。